

左京区の未来をつくる区民会議 第6回「次代の左京まちづくり会議」(摘録)

日 時 平成22年9月14日(火) 午後2時～4時

場 所 旧別所小学校講堂

出席者 別紙委員名簿のとおり

内 容 (要旨)

(1) 宗田座長挨拶

- ・新京都市基本計画の1次案では、5つの京都の未来像が掲げられていたが、未来の担い手・若者会議U(アンダー)35の若い委員からの提案により、今回新たに「真のワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)を実現するまち・京都」が追加された。左京区においても、その展開を考えることが重要であると思う。
- ・時代が少しずつ変わっていく中で、働き方の問題や地域社会への参画、貢献といったことも見据えながら、新しい計画を検討していくことが大切である。

(2) 京都市基本計画第2次案について

○事務局からの説明(資料1のとおり)

○宗田座長からの補足説明

- ・京都市基本計画第2次案の主なポイントは、全体的に環境問題を重視していることである。前の基本計画では経済活性化に向けて、高速道路整備などの取組が中心的に書かれていたが、新しい計画では、生活面でも産業面でも環境を中心とした取組が掲載されている。
- ・新しい計画は、地域主権時代を踏まえ、市民による参画と協働による市政運営とまちづくりの実現を目指した構成となっている。

○意見交換

副 座 長 ・新しい計画の策定に当たっては、単に自然環境を保全するだけでなく、社会との関わりや交流の中で環境を考えることがこれからは重要である。

委 員 ・ワーク・ライフ・バランスの実現については、社会人として働いている人を主なターゲットとして描かれており、子どもと関連した記述が少ないと思う。地域活動には子どもを中心とした行事が多いので、子どもが社会の一員であることを伝えるような部分があってもよいのではないか。

座 長 ・確かにワーク・ライフ・バランスの実現の記述の主なターゲットは社会人である。これまでは、会社のために働く会社人間はいるが、日本、京都、左京の社会のために働く社会人はあまりいなかったといえる。仕事は一所懸命するが、地域社会に対して積極的に取り組む人は少なく、町内会や自治会と

いった地域社会と疎遠になっている現状がある。

- 地域で商売をされている方や職人の方は、必然的に地域社会と深いつながりをもっているが、一般の民間企業で働く人は、地域社会とあまり深い関わりを持つことが少ない。労働人口のうち、地域の中で働く人は現在15%程度になってしまった。地域社会の担い手が非常に少なくなっている。さらに、共稼ぎが増加する中で、お母さんまでが地域社会とのつながりが希薄になっている現状がある。先日の新聞に、小学校1～3年生のお宅のうち、放課後に両親が留守である家庭が3割あるとの記事があった。
- 一方、終身雇用など、これまで日本の企業を支えてきた仕組みが変化している中で、会社人間として働いてきた優秀な人材に、地域で活躍してもらうことも重要な時代になってきている。京都には世界的な企業が立地しているが、そのような企業の社員の方が、高齢者の方にばかり地域のことを任せるのではなく、もう少し地域社会で活躍してもらうことが必要になってきている。
- また、若い優秀な大学生の方々にも、大企業を目指すばかりでなく、地域に入り込んでいただくような方向性を見出していただくことも重要ではないかと思う。

委員 • 次世代を担う大学生に地域社会で活躍してもらうためには、京都市からの呼びかけや、自己啓発を促したりすることも必要だと思う。

委員 • 会社人間が多いという話があったが、最近、家庭を大事にする男性も増えてきているように思う。最近、民生委員になってもよいと言われる若いお父さんの方が増えてきている。

委員 • 会社人間が当たり前であった時代には、学校でいい点数をとって、大きな会社に入ることが一番の価値と言われていたが、雇用が不安定になってきた現在では、社会としての理念や目標を改めることが必要ではないか。

• 例えば、この北部の山間地域で生まれ育っても、働く場所がないと他の所に出ざるを得ない。こうした問題は、個人ではなかなか解決することができない。地域内でできる仕事を、京都市をあげてつくっていくことも必要ではないか。雇用が不安定になり、失業も増えている今だからこそ、考えていく必要があるのではないか。

副座長 • 京都市基本計画の意見募集用冊子の中には、環境を大切にするための多くのイラストが描かれているが、殆どが市街地において、川や緑を守る活動の絵になっている。緑の自然そのものの中での暮らしについてのイメージが描かれておらず、山間部の自然を守るといった趣旨のものが少ない。山間部での将来の暮らしのイメージを打ち出すことも必要ではないか。

委員 • 都会の緑と、花脊地域の緑を守ることは、本質的に異なると思う。真のワ

ーク・ライフ・バランスを実現していくうえで、都市部での生活のイメージはできるが、山間部での暮らしではどのように実現していくのかを考えると難しい。

- 座長
- ・これまでの雇用政策のように工場を誘地することは難しいだろう。山間部などにおいて働ける場所をつくっていくためには、農業のやり方が変わることも必要だろう。
 - ・自然食や有機農業が、社会に受け入れられるようになっていく中で、この自然を生かした農業の展開も考えられる。また、人々が交流するといった視点も重要となっている。久多地域を訪れる人は多いが、久多には泊まる場所がない。第1次産業の農業、第2次産業の加工、第3次産業の宿泊や飲食といったことを、総合的に展開していくことが必要ではないか。
 - ・地域のまちづくり委員会において議論していただきたいテーマであり、地域自らが考えて行動していくことも求められるのではないか。
- 委員
- ・北部のまちづくり委員会では、地域活性化に向けた検討を重ねている。地域を何とかしなければという思いから、それぞれが地域の課題を持ち寄り、できるとき、できることを、できる人（“3D”）がひとつずつ解決している。
 - ・この花脊地域を訪れる多くの方々には、この地域のことを「いいところですね」とおっしゃる。しかし、60数年、ここで暮らしている我々にとっては、仕事がない、生鮮食料品を売っているところがないなど、必ずしも全ての面で「いいところ」ではない。
 - ・月に1件ぐらいは、この地域で暮らしたいと希望される方から問合せがあるが、土地を買いたいという人は少なく、ほとんどが借家を希望される。空き家は増え続けているものの、すぐに使える空き家はあまりない。水周りや床を直さなければならない。
 - ・いきなり定住は難しいので、体験的に暮らすことのできる仕組みが必要ではないか。借家などで、半年や1年くらい体験的に暮らしていただくことができると考えている。広河原で借家を借り、食料、寝袋持参での体験などを行っている。
- 座長
- ・改修費用として1軒あたり100万円程度あれば、何とかできるのではないか。
 - ・田舎の定住に向けて、年20件程度支援することは可能ではないだろうか。
- 委員
- ・和歌山などの先進事例の視察に行ったが、成功しているところは、いずれも体験ができる施設を持っている。
- 座長
- ・この地域のまちづくりのテーマとしては、定住促進、交流人口促進が中心的なものとして考えられる。

- ・空き家の活用，定住体験施設の整備は，都市計画的な取組か，農業振興の取組か，考えなければならない。一度，検討を行ってみる価値がある。
- ・最近，アレルギーを持つ子どもを抱える親御さんが，エコビレッジの取組に参加されたり，山間部への移住を希望されたりしている。このような社会ニーズもふまえながら，山間部の定住促進を考えていく必要がある。

(3) 新左京区基本計画 素案への意見募集について

○事務局からの説明（資料2のとおり）

○意見交換

- 座 長 ・ 区民の方から多くの意見をもらっている。
- 委 員 ・ 内容をみると，意見というより，要望が多いように思う。
- ・ 意見募集の結果の中に，久多の自治活動について評価されている意見があった。これまで頑張ってきたかいがある。
- 区 長 ・ 今回の計画は，心の問題など抽象的なものが多いので，もっと意見が少ないと思っていたが，実際には数多くの意見が寄せられた。
- 座 長 ・ 現在，社会全体が過渡期にあると思う。久多地域の観光農園の人気の高いほか，市街地では桂川などの貸し農園の人気の高い。本来的な生産農地が減少する一方，一般市民が耕作する趣味的な農地が増加している。農地保全の担い手として，農家の方だけでなく，一般市民の役割も重視していくことが必要となってきた。
- 委 員 ・ 北部地域でも，市民農園のニーズが高まっている。しかし，鳥獣被害が大きなネックとなっている。一般市民の方が，足繁く久多を訪れ農作業を行っても，収穫期になるとすべて荒らされ，意欲がなくなってしまう。
- ・ 市民農園などの交流で，この地域に住みたいと思う人を少しでも増やしたい。鳥獣被害で，その道が閉ざされてしまうことのないよう，ご配慮願いたい。大きな向上は望まない。地域でできることをやっていきたい。
- 委 員 ・ すべてを解決することは難しいと思うが，上手く共生する道を模索せざるを得ない。
- 委 員 ・ 山間地域で農作物をつくることは，そもそも経営的には成り立たない。それに加えて，サルやイノシシなどの獣害があると，農地を維持することはほとんど不可能である。
- ・ 京都市全体として，自然環境保全，農地保全を進めるのであれば，まず，獣害被害を食い止めることを公的に支援しないと進まないのではないかと。
- ・ 八瀬や大原では獣害対策のため，農地の周りを金網で囲った状態で農業を行っているが，それでもサルやイノシシは網をくぐって荒らしていく。
- 座 長 ・ 京都府では鳥獣害被害に対して2億4千万の予算をつけている。そのほかシカ，サル，クマを特定鳥獣として，保護管理計画に従って個体調整を行っ

ている。

- ・京都府でも事業仕分けを行っているが、この経費も対象となっている。毎年、対策を行ってもその効果が表れておらず、根本的な対策を行わないと、年々、必要経費がかさむだけの状態となっている。
- 委 員**
- ・鳥獣被害については、東山でも直面している。被害を受けている人の気持ちを逆なですることかもしれないが、動物と共生することが必要ではないかと思う。
 - ・一部分であるが、数年前から私が関係しているところでは、イノシシ、サル、シカが里に下りてこないように、山にドングリやカキ、クリ、モモなどの実のなる木を植樹している。特にドングリは、秋になると足の踏み場もないほど落ちているのに、冬になるとその実がなくなっている。動物が食べていると思われる。
 - ・最近でも山からサルやシカの声は聞こえるが、民家への被害は減少している。人間への被害が出ると駆除しているが、彼らも生きるために餌を探しているだけである。
 - ・私たちの祖父の代に、多くの杉の木を植林したが、手入れを怠っているため、十分に育っていない。それが放置林として荒れている。それを間伐して、実のなる木を植林している。そのように山を変えていくと、動物と共生することができるのではないか。
 - ・ここまで植生を変えてしまった中で、動物と共生できる山に再生することも人間の責務ではないか。現在、年間に800本ほど植林している。枯れるものも多いが、めげずに続けている。去年は、シイタケの原木の設置も行っている。大文字山では、サルやシカが民家に近づくことが少なくなっている。
- 副 座 長**
- ・最近、ナラ枯れが目立つようになっている。実のなる木が枯れてしまい、常緑の木が繁茂すると、動物の餌が減少し、農地への被害が多発するようになる。
 - ・ナラ枯れを抑えるためには、人の手が必要となるが、そのためには、山が資源を生み出し、地域の産業として成り立つようにすることが求められる。
 - ・自然と共生するという事は、単に自然を保全することではなくて、いかに地域の暮らしと密接なかかわりを持ち、農業なども含め、全体としてのバランスを取ることが求められる。
- 座 長**
- ・京都市未来まちづくり100人委員会からチマキザサ再生プロジェクトが生まれ、上手く動き出しているので、今度は、ドングリ再生プロジェクトを展開するのも良いかもしれない。
 - ・獣害対策として、そのような活動を少しずつ進めていくことも必要だろう。

例えば、小学校が当番制で植林をするなど、左京区ならではの教育プログラムを考えて良いかもしれない。自然を愛でるプログラムとしても考えられる。

- 委員
- ・小学生を対象に植林などを行うプログラムはあった。あとの管理は地域にお願いすることになっていた。私の方では、植林から管理までを行う取り組みを行っている。4年生が植林を行ったら、次の年には新4年生が管理をするといったような取組を実施している。
 - ・数年経って、収穫が行えるようになると、高校生も呼んで収穫祭を行う。植林した本人が、数年たってから収穫に立ち会うようにしている。学校に連絡すれば、そこから卒業生へも連絡ができる。自分が植えたものが、どう育っているのか、研究している子どもいる。
 - ・最近の学校では、数名単位の班で活動をしている。そのような学校の仕組みと連動した取組を考えることも必要である。
- 委員
- ・地域で集まると、獣害被害の話ばかりになる。しかし、私たちが、動物たちが住めないような環境をつくってしまった結果だろう。杉については拡大農林と称して、山全体を杉林にしてしまった。植林地には一切、動物の餌となるものがない。動物もかわいそうだ。
 - ・滋賀県と京都府の対応が異なり、滋賀県が多くの予算をもって、サルを追い込むため、動物が京都側に移動している。
 - ・別所にはサルが住みつかない。サルのお宮さんがあるので悪さをしないのでは。
 - ・クマは絶滅危惧種になっている。しかし、人に危害を与えたクマも処分してはいけないのか。被害が拡大してから対応しても遅いのではないか。
- 座長
- ・クマが人間に被害を与えた場合は処分できる。農地に被害を与えた位で処分するのはかわいそうという見方もある。
- 委員
- ・計画の取組内容が実現されれば良いと思うが、そこに至るまでには多くのハードルがあると思う。私は、行政とのかかわりが深い人は、このような情報に触れることができたが、一般の人にはこのような情報は、なかなか届かないだろう。この情報に接した私が広げていかなければならないだろうが、どこまでできるか自信がない。
 - ・学校情報については、書面やメールで得ることができるが、このような左京区の情報を一般の人にも届けるシステムをつくる必要があるのではないか。
- 座長
- ・情報経路としては、学校経由か市政協力委員経由しかないだろう。しかし、市政協力委員も人数がたくさんいるわけではない。
- 委員
- ・おやじの会では、中学2、3年生を対象に、マンツーマンでテーマを設けないで色々な話をしているが、地域のことについて話し合うことも多い。

このように子どもと大人が対等に話し合う場をつくることを進めていけば、地域のことに興味を持つ子どもも増えるのではないかと。

- ・企業や商店街などにもお手伝いをしてもらっているが、いろんな大人と子どもが交流する場を設けることが、情報を広げることに繋がるのではないだろうか。

(4) 新左京区基本計画(案)の検討について

○事務局からの説明(資料3のとおり)

○意見交換

- 座長 ・ 次の会議を10月22日に開催し、再度、この場で計画書の最終確認を行いたい。
- ・京都市基本計画審議会の会長の尾池先生を招いてシンポジウムを行いたいと考えている。尾池先生は、地学が専攻で、花折断層など、左京区をフィールドとしているため、左京区に非常に興味をお持ちである。
 - ・計画案に「美しい自然のまちづくり」があるが、この部分については、本日、徹底的に議論したかと思う。左京区方式や花脊方式といった、自然との共生に関する具体的な展開につなげていければと考えている。サルも暮らせる地域をつくるといったことも重要なテーマになったのではないかと。
 - ・計画案の12ページでは、定住や交流についても取り上げられている。本日、この点についても議論を行ったかと思う。
- 委員 ・ 私は岡崎に暮らしているが、花脊のことについては何も知らない。同じ左京区にありながら、シカやサルに困っているなんてことは、全然知らなかった。
- ・特に、子どもに対する情報発信がないと、地域を考えることにつながらないのではないかと。学校からの情報提供となると、先生にお願いすることが多くなるが、先生も、そんなに情報を持っているわけではないだろう。情報提供が大きな課題だと思う。
- 座長 ・ 最近では、多くの小学校で、コミュニティスクールを実施している。コミュニティスクールとは、PTA、先生、自治会の役員の方が集まって協議する場を設けることである。
- ・コミュニティスクールを実施すると、地域と学校の先生のつながりが生まれた。そうすることで、地域情報が学校に伝わり、学校の取り組みを地域が応援する体制をつくることができた。
- 委員 ・ 第1回目の地域の日では、子どもと高齢者が一緒になって昼食を食べている。そのような地域の取組はある。
- 座長 ・ 次回が最終回となる。それまでに、さらに内容を吟味しておいて欲しい。

- (5) 新左京区基本計画の策定日程について
○事務局からの説明（資料5のとおり）